

## 報告「共生の多様な意味合い」

### I. はじめに

- ・ 国際共生研究所の掲げる「国際共生」の課題への共感
- ・ 国際基督教大学 (ICU) でも 2003・2008 年にわたり 21 世紀 COE プログラム『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開 → そのなかでいくつかのプロジェクトが「共生」概念の研究に携わる

#### 私たちの発見のいくつか

- ① 「共生」にはいろいろな訳語が可能である。例えば、英語では *coexistence*, *symbiosis*, *living together*, *cohabitation*, *conviviality* など。上記の ICU の COE プログラムでは、「共生」の訳語としては英語の *conviviality* を使用。*Conviviality* → 自他の存在の独自性を承認しつつ、相互にコンヴィヴィアルな仕方(喜びと存在を共有する仕方)で関係性を構築し、協働していく意味でよいと判断した。
- ② しかし、やはり日本語の「共生」を十全に表現する英語の単語はないことが分かり、*kyosei* という言葉を外国語文献においても使用し、説明することにした。( *kyōsei* とすべきだったかもしれません。)
- ③ 上記の COE プログラムとの関連で数多くの国際会議を開催。その結果、「共生」はアジア言語圏においてはフィリピンや中国など、多くの国の言語が日本語の「共生」と対応する用語をもっていた事実が判明。E.g., 韓国では「相生」(*sangsaeng*)、「共生」(*kong-saeng*)、中国では「共生」(*gong-sheng*)。E.g., Akihiro Chiba, ed., *Strategic Planning of Education for Conviviality in Asia, Report of the Third Consultation Meeting*, 2006.
- ③ また英語の *conviviality* はスペイン語の *convivencia* との関連で馴染み深い概念で、スペイン語圏の研究者には好評。Cf., *conviviality* を社会科学の概念として使用した最初の研究者の一人は、メキシコ出身の Ivan Illich であった。また東ヨーロッパ語圏の人々にも *conviviality* は大変好評で、これに対応する用語があるとのことだった。

- ④ ただし、conviviality の場合、陽気な協働性のあり方や生の祝祭性を示す言葉として重要なことが分かったが、同時にその英語の用語のもつニュアンスとして、宴会やパーティーなど、人々の飲食を中心とした和合が意味されることが多く、学問的専門用語として定着させることに躊躇する傾向がみられた。
- ⑤ しかし、全般的にみると、「共生」も conviviality も、世界で十分に使用可能な重要な用語であることが判明した。

## II. 「共生」の多様な意味合いとグラデーション

- ・ 「共生」の概念は定義上、意味が曖昧であり、人文科学や社会科学の概念としては使用し難いという批判がある→しかし、「共生」の多様な意味合いとグラデーションは、むしろこの概念の強みと特質を示しているともいえる。

### この 30 年程の日本での議論で浮かび上がってきた 3 つの「共生」モデル

#### ① 寛容モデル

- ・ 1980 年代に日米間の貿易摩擦問題が加熱するなかで、著名な建築家であった黒川紀章氏は「共生」という用語を相互の共存共生としての寛容な棲み分けの意味で使用し始めた→他者の文化や伝統を相互に承認し合いながら、それぞれの神聖な文化的価値の領域 (sanctuary/聖域) には踏み込まず、相互に棲み分け、相互の価値を尊重する態度としての「共生」→これは、後にマイケル・ウォルツァーが展開した「寛容」論——相互の co-existence の模索——ときわめて類似した考え方であるので、「寛容モデル」(消極的平和) と名づけたい。E.g., 黒川紀章『共生の思想』(徳間書店、1987 年)。Michael Walzer, *On Tolerance* (New Haven: Yale University Press, 2004).

#### ② 会話モデル

- ・ 法哲学の分野でリベラリズムの考察を進めてきた井上達夫氏によって提起された「共生」の理解→通常の「会話」という営みのなかに「共生」の本質的な要素があるとすると→異なる人々や集団のなかに自発的で喜ばしい相互交流の場をもつこと、フェアプレーで喜ばしき交流に参加すること、必ずしも何らかの目的を実現しなくてもよいとする→「会話モデル」と名づけたい。E.g., 井上達夫『共生の作法——会話としての正義』(創文社、1986 年)。

#### ③ 共通性モデル

- ・ 「共生」はここでは、種々の集団間の交流と協働、自然環境と人間社会との公正かつ建設的な共通性の関係の構築などを意味する→今日、たびたびスロ

ーガンとして提起されるものとしては、「人類と自然との共生」、「異文化間や異民族間の共生」、「男女の共生と共同参画」、「健常者と障害者との共生」など→つまり、異質な主体間の相互の個性の尊厳を尊重し、その上で公正な連帯を模索する「共生」の規範概念（積極的平和）。E.g., 吉田傑俊・尾関周二編『共生思想の探求——アジアの視点から』（青木書店、2002年）。

- ・ こうした3つのモデル、3つのグラデーションは、「共生」概念の多様さと幅の広さを意味し、この概念の強みと特質といえるのではないだろうか。いずれのモデルも、具体的な状況に応じて、紛争解決や平和構築にとって重要。

Cf., ヨハン・ガルトゥングのコメント

「共生とは寛容に加えて会話であり、それらに加えて共通性であるという。さらに共生は、生に反するものや不調和や暴力を脱して、より高次のレベルの共なる生活へと発展していくものであるという。日本の平和研究は、共生を導きの灯とすることによってその包含する諸種の豊かな意味合いを汲みとることができ、戦争と暴力からの解放にとどまらず、より積極的な平和を追求することにおいてよい方向をたどりつつある。積極的平和は、これまでより不十分な形でしか展開されていないが、日本はそれに取り組むための豊かな伝統と聖域、良質な会話と共同プロジェクトを有している。」（村上陽一郎・千葉眞編『平和と和解のグランドデザイン——東アジアにおける共生を求めて』ICU 21世紀COEシリーズ第10巻、風行社、2009年）、309-310頁。Cf., Johann Galtung, “Toward a grand theory of negative and positive peace,” in *A Grand Design for Peace and Reconciliation: Achieving Kyosei in East Asia*, eds. Yoichiro Murakami and Thomas J. Schoenbaum (Cheltenham, UK and Northampton, MA, USA: Edward Elgar, 2008), p. 105.

### III. おわりに

- ・ 「共生」の平和イニシアティブが実現される場としての東アジア：  
和解と平和構築の実現のために
- ・ 2011年3月11日の東日本大震災とその意味：  
「エコロジー」と「共生」の価値規範に基づく将来の日本・東アジア・世界の制度構想